

臼井吉見

獅子座

第一部

賀茂行幸のこと〈上〉

筑摩書房

獅子座 第一部 賀茂行幸のこと〈上〉

一九七九年十二月二十日第一刷発行

著者 臼井吉見

発行者 関根栄郷

印刷 明和印刷
製本 矢嶋製本

発行所 筑摩書房

東京神田小川町二ノ八
振替東京六―四―二三
電話東京二九一―七六五二（営業）
二九四―六七二一（編集）

獅子座

第一部

賀茂行幸のこころ

装帧
枊折久美子

その一

事件のおこった、あの朝のことは、いやにはつきり覚えてゐる。とびあがり、あばれん坊の中山忠光が、いきなり、出奔蒸発した日のことだ。

夜ふかしがたたって、寝坊をしたために、例によって、老女の相模に、がみがみせきたてられて、家を出た。

わるいくせで、とたんに首をすくめたのは、われながらなさけなかった。ここ二、三日つづいた、きつい花冷えのなごりも、なごんだと見え、顔をなでる空気も、今朝はつめたくはなかったのに。

もっとも、今日は三月十九日（陽暦の四月二十八日）で、賀茂神社行幸から、まだ八日しかたっていない。あの日は、終日、寒い雨がふりこめていた。

いつものように、左手の大榎を見あげると、蛤御門の屋根にかぶさって、中空に、網の目をひろげた、こまかな枝のさきさきまで、若葉が息づいている。すけて見える浅葱いろの空までが、匂うばかりの明るさだった。

キヨロン、キヨロンツイーと、からだのわきの橙いろをちらつかせて、枝うつりしているさえずりにも、心のはずみを覚えた。頭のとっぺんから背中へかけて茶褐色、胸と腹の両がわは、赤みが加つて、まんなかは白い。

頬と喉のまっ赤な鶯が、梅の花を散らしていたのは、つい先ごろのことだった。

いまはもう、あかはらが、姿を見せるようになったのかと思うと、人間の世のあらそいごととはかわりなく、季節の足どりの、なんと静かで、たしかなことかと、目をみはる思いだった。

はだかのまま、ふるえていた榎に、粉雪が吹きつけて、終日、一羽の鳥のおとずれもなく、わずかに近所の勧修寺家の生垣の南天を渡るみそさざいのゆくえを知らせるかのように、次々に粉がこぼれ落ちたのも、つい昨日のことのように目に残っている。

さきころ、吉野桜のつぼみも、にわかにくらんで、赤みをのぞかせたというのに、一夜明けると、御所の庭が、時ならぬ雪の真綿でよそわれたのは、たしか行幸の数日前のことだった。あれから、まだ半月ほどしかたっていない。

思えば、年が明けてからでも、三か月あまり、次から次と、いろんなごたごたがつづいた。長いこと、つもりにつきもり、たまりにたまつたもやもやが、はけ口をもとめて、一気にふき出してきた感じだった。

こんどの賀茂行幸で、首尾よく光明をつかんだ思いで、わけても若手の平公家なぞは、やみくも有頂天になっているが、父の胸中を考えただけでも、何が何やら、見当もつかなかった。まして、七十五歳を迎えた、祖父の太閤・鷹司政通ときたら、わけても正月このかた、いっかな口をきこうともしないで、かたくなに、にがりきっている。

公望^{きんもち}としては、そんな祖父の気持ちもわからなくはなかった。わからないどころではない。伯父の鷹司輔熙^{すけひろ}、父の徳大寺公純^{とくだいじ きんじゅ}、兄の徳大寺実則^{さねのり}にくらべても、祖父の機嫌^{きげん}のありどころが、いちばんよくわかるように思えた。五十七歳の伯父、四十三歳の父、二十五歳の兄よりも、七十五歳の祖父のころの奥が、十五歳の自分のにのぞけるなんて、自分ながら、へんな気がしなくてもなかった。

祖父の政通が、伯父の輔熙ともども、謹慎の上、落飾^{らくしやく}（頭髪をそり落して、仏門にはいること）を仰せつかるといふ、さんざんな目にあつたのは、安政六年（一八五九）四月のこと。父も、とばっちりを受けて、謹慎になった。坊主にこそならなくてすんだけれども。

ところが、祖父の仇役^{かたきやく}だった、ときの関白九条尚忠^{ひさただ}は、あべこべに、幕府から、家禄千石と職俸五百俵を加増されたのだった。これで、九条家は、三千四十三石あまりになったわけで、千五百石の鷹司家との収入のちがいは、いよいよ、大きく開いてしまった。同じ摂家^{せつけ}でも、九条家は、筆頭の近衛^{このえ}家に次ぐ格で、末席の鷹司家としては、とかくひけ目があった。おまけに、現職の関白であり、准后^{じゆごう}の夙子^{あそこ}は、尚忠の娘でもあるから、天皇にとっては、舅^{しゅうと}にも当っている。そこへ、祖父は、幕府のおしつけとはいえ、勅命によって、親子そろって、髪を剃^そられ、坊主にさせられるというさわぎ。一方は、幕府からの贈りもので、千石の加増ときている。若いころから、「鷹じるし」の仇名^{あだな}で通ってきた、公家きつての負けん気で、めっぽう気性の強い祖父としては、はらわたの煮えくりかえる思いだったにちがいない。

それが三年後の昨年、文久二年四月には、復飾^{ふくしやく}（髪をのばして還俗すること）を命ぜられ、なんと、勅^{みこと}して蓄髪^{ちくはつ}せしむ、ということになった。ふた月ほどおくれたが、伯父の輔熙も同様だった。九月になると、こんどは、九条尚忠が、逆に落飾^{らくしやく}を仰せつかるといふ始末。三か月前に、関白の席は、近衛忠熙^{ただひろ}にゆずら

せられてはいたが。いずれも、朝廷のまきかえしによるものだが、このどんでんがえしは、井伊大老暗殺という桜田門事件に由来する。

近衛忠熙も、鷹司親子同様、落飾と復飾とをくりかえさせられてきたのだった。

忠熙は、素直に復飾し、髪もののびないまま、尚忠の後をうけて、関白を拝命した。祖父の政通ときたら、復飾・蓄髪の勅命を、すげなく辞退した。天皇への書面には、老齡のゆえとあったそうだ。家族にむかつては、ばかナ、髪を剪^きったり、のばしたり、そんな器用なまねができるものか、とたいへんな権幕で当りちらしたことを、公望は忘れることができない。

しかし、落飾を命ぜられた尚忠は、これまた思いのほか素直に、あたまを剃り、円心と名のつて、念仏三昧の日をすごしているとか。

道一すじ距てた、鼻さきの九条家の大きな屋敷が、去年の秋以来、ひっそりかと静まりかえっているさまは、誰の目にもまぎれはない。ひところは、いまいましくって、いても立ってもいられぬかに見えた、さすが剛腹^{こうふく}の祖父も、こうなっては、いくらか気持もなごんだらしかった。

幕府に加担して、「関東関白」とまで仇名のついた尚忠と真向^{まきむか}うからぶつかって、ともども幕府に抵抗した、いまは亡い内大臣・三条実萬^{さねつむ}の上を偲^{しの}べば、いつまでもこだわっていられるわけもなかった。

アメリカとの条約をめぐつての、幕府のかさねがさねの無礼なしうちに、癩癩^{かんしやく}をおこした天皇に、退位を持ち出されて、なだめようもなく、朝廷^{てうてい}の高官連が、はたと固唾^{かたず}を呑んだとき、水戸藩への密勅降下を、まっさきに発言して、急場をしのぐきっかけをつくったのが、三条実萬だったのだ。

この思いつきは、彼自身ではない。在京の民間尊攘派志士^{しん}の梁川星巖^{やながわせいがん}、梅田雲浜^{うめだうんぴん}、池内大学らや、

彼らと通ずる高級公家の諸大夫たちが、ひそかに往来して、耳うちしていた謀略であった。それがいつのまにか、天皇側近の重臣、鷹司父子、近衛、三条の四公の耳にとどけられていたのだ。

大老の井伊直弼（彦根藩主・三十五万石）の意を受けた老中の間部詮勝（越前・鯖江藩主・四万石）が、幕府の外交処置について、朝廷への諒解工作を名目に上京、新しく任命した京都所司代の酒井忠義（若狭・小浜藩主・十万四千石）や大老井伊の腹心、長野主膳らが、謀議をこらして、入京と同時に、ぬく手も見せず、朝廷、公家をふくめて、目ぼしい尊攘派の反幕分子を根こそぎ斬って捨てるといふ、大がかりの弾圧政策に乗り出したのだ。世にいう安政の大獄のはじまりである。

間部らは、天皇側近の四公を水戸派とにらみ、あるいは太閤派、あるいは悪謀党として、その罪をあばき、用意した処罰案を九条閑白を通して、天皇に告げてきた。悪謀党というのは、京都尊攘派の長老、梁川星巖をはじめ、梅田雲浜、池内大学、頼三樹三郎と、その同志の一派をさしたものだ。幕府がわでは、この四名の民間儒者を四悪謀と呼んでいた。

井伊大老が決意したクーデターまがいの攻撃目標は、つまるところ、二つにしぼることができる。武家では、関東尊攘派の大御所、徳川齊昭（水戸の前藩主、三家・三十五万石）であり、公家では、京都尊攘派の首領と仰がれた青蓮院宮尊融親王である。宮に次ぐ目標が、鷹司太閤以下の四公であったことはいうまでもない。

とびきり利発な少年ではあっても、こんな事情は、もとより、公望なぞの知るよしもなかったが、大老や幕閣がにらんだ危険人物第一号は、水戸の斉昭だった。わけでも、彼の京都への政治工作は、幕府として、とりわけ警戒しなくてはならない性質のものだった。自分の意見が、さっぱり幕府に採用されないので、焦慮と危機感をふくらませては、それを京都へ訴えるくせがついてしまった。こと

ごとに京都の尊攘派と連絡をとって、朝廷を通して、天降りに、いろんな要求をおしつけてくる。だいたいの斉昭という男は、尊大で、見えつぱりで、野望のかたまりみたい、おまけに、油断も隙もなく、目から鼻へぬけるところがある。

京都に対する工作には、あらゆる手口を使ったが、そのおもなものの一つとして、太閤鷹司政通を通して、遠慮のない私見を朝廷に送りこむことであつた。鷹司太閤の夫人は、斉昭の姉であるから、斉昭にとって、政通は姉婿にほかならない。筆まめの斉昭は、京都の義兄にあてて、根気よく手紙を届けた。相手が読もうが読まいが、返事が来ようと、来まいとかまわなかつた。天皇の周辺で、自分の意見の一つ、二つぐらい、いつかは話題にされると計算していた。それほど効き目はなくても、太閤自身の考えを、いくらかは動かすことができるはずと信じて疑わなかつた。

しかし、剛氣で鳴らした太閤が、関東の田舎の鼻柱の強い義弟の言いぐさなんぞに動かされるわけはなかつた。むしろ、水戸とは、まるきり反対の意見の主張者だつた一時期さえある。返事など出したことは、一度とてなかつた。

そのくせ、せつせと手紙で吐露してくる、厚かましい義弟の意見は、しばしば、高官仲間の話題にのぼつたことだつた。

この節、一日々々と持ちまわしおり候えども、太平も、もはや二百四五十年に相なり候えば、つまり戦争に至り申すべく、戦争これなきうちは、真の太平は、決して出来申すまじく存じたてまつり候。ひたすらに戦争を忌み恐れ候えば、後年にいたり、大乱世と相なり申すべく、ただいまのうち決断いたし候えば、たとえ小戦争これありても、また中興の勢もこれあるべく、しかしながらこ

の儀は、將軍の胸中より発し申さずては出来かね候……

水戸からの手紙といっても、およそは、この手のひとりよがりの、肩肘かたひじはった文句がたらねられて
いるにすぎなかった。

だが、幕府はそうは見えていなかった。斉昭こそは、国難につけこんで、本家である徳川家の乗っ取りをたくらんでいる、朝廷の高官連を遠くからあやつっているのは、すべてこの陰謀のすじにつながっていると、とりわけ大老井伊はにらんでいた。

水戸の前藩主徳川斉昭に対する、大老井伊直弼の疑惑と反撥は、徳川家の親藩しんぱん大名のうち、尾張、紀伊、水戸の三家さんけや、三家に準ずる家門かもんと、譜代大名との間の、伝統的な感情のからんだものでもあった。

家門の筆頭は、越前・福井藩（三十二万石）であるが、ほかに、会津藩（二十三万石）、伊予・松山藩（十五万石）、松江藩（十八万六千石）、美作みまさか・津山藩（十万石）など。

譜代大名というのは、世襲的な主従関係をもつ家臣大名のこと。徳川家の譜代は、三河が中心で、その後服属した家臣によって構成された。

はじめ家康は、一万石以上の譜代四十名あまりを創成したが、のち六十余名に拡大した。五万石以下の小大名が多い。じつに百四十五家を数えた。全国の要地に配置され、老中、若年寄などの要職を独占し、徳川家を支える有力な基盤となった。

譜代大名の筆頭が彦根藩（三十五万石）である。

彦根井伊家の藩祖直政は、徳川家康に仕え、野戦の猛将として、その名をとどろかせた。関が原の合戦には、手兵三十騎の先頭に立って、福島正則のすきをつき、敵陣の真只中におどりこんで、初戦の勝利のきっかけをつくった。

家康の信頼は大きく、彦根三十五万石を与えて、譜代の筆頭に据えたばかりか、遠い関東を流れる利根川の管理権まであずけた。この管理問題をめぐって、水戸と彦根はしばしば刃傷沙汰に及んでいる。

三家・家門と譜代との間は、とかくそりが合わなかった。譜代の代表にいわせれば、親戚面して出しゃばるな、控えている、という感情であり、三家・家門からすれば、番頭・家来のくせに、親戚もはばかりず、大きな顔をするな、ということになる。水戸の斉昭と彦根の直弼との反目は、個人的な性格のほかにも、こうした伝統的な感情に深く根ざしていた。

いずれにせよ、心底には、政権の独占維持と、それへの割りこみからまる政争の渦があった。つまり永久政権を握る溜間詰と、それに反撥する大廊下詰、これに加勢する大広間詰の対立とみることもできる。

天下の三百諸侯も、將軍の鎮座する江戸城では、家格と因襲によって、それぞれの詰める部屋別に席次がきびしく差別されていた。最高の席が大廊下。表座敷で、浜松と千鳥の襖で区切られている。上・下の二部屋から成っていて、上は、尾張（六十二万石）、紀州（五十五万五千石）、水戸（三十五万石）の三家にかぎられている。

下は、越前の松平（家門・三十二万石）、作州・津山の松平（家門・十万石）、加賀の前田（外様・百二万三千石）、阿波・徳島の蜂須賀（外様・二十五万八千石）、筑前・福岡の黒田（外様・五十二万三千石）、

播磨・明石（家門・八万石）の松平など、元老格の大藩、親藩の数藩にすぎない。

次が溜間だ。いわゆる黒書院で、ここぞ実力集団のたまりである。閣僚である老中の御用部屋に対しても、伝統的な権威を保ち、幕府の政治顧問として、將軍や老中に意見具申する特権をもっている。常溜と飛溜の区別があつて、常溜は、代々ここに詰める家格の者で、黒船のきた嘉永六年でいえば、彦根（譜代・三十五万石）の井伊直弼（39歳）、会津（家門・二十三万石）の松平容保（19歳）、讃岐・高松（連枝・十二万石）の松平頼胤（44歳）の三家だった。飛溜は、そのときの藩主の人物次第によるもので、姫路（譜代・十五万石）の酒井忠宝（25歳）、伊予・松山（家門・十五万石）の松平勝善（37歳）、桑名（家門・十二万石）の松平定猷（20歳）、武蔵・忍（家門・十萬石）の松平忠国（39歳）、下総・佐倉（譜代・十萬石）の堀田正睦（44歳）、若狭・小浜（譜代・十萬四千石）の酒井忠義（41歳）らだった。つまり、溜間詰は総勢九名で頑ばっていたことになる。老中は、おおかた、この仲間から出た。

溜間の次が、大広間だ。ここは上・中・下の三段に分れている。上は、襖に、松鶴が描かれている。中は松雪、下は松である。二の間、三の間は、壁に、牡丹の絵がある。

ここは、国持大名の席で、薩摩（七十七万石）、仙台（六十二万五千石）、長州（三十六万九千石）、岡山（三十一万五千石）、広島（四十二万六千石）、熊本（五十四万石）、佐賀（三十五万七千石）、土佐（二十四万二千石）などの大々名のほか、弘前（十萬石）、盛岡（二十萬石）、二本松（十萬一千石）、前橋（十七萬石）、松江（十八萬六千石）、宇和島（十萬石）、加賀・大聖寺（十萬石）、津和野（四萬三千石）などが数えられる。ことごとく、外様ならざるはない。もつとも、美濃・高須（連枝・三萬石）なども、まじっている。だいたい、政權から永久しめ出しを食っている面々だ。そのくせ、津和野や高須などの例外もあるが、負けず劣らず、資力はどっさりときている。大広間には、こんなのが、二十八家詰めていた。

これらは、関が原のいきさが止んでから、新しく徳川家に帰属した大名であつて、譜代の小粒なにくらべて、大ものが顔を並べている。幕府にとっては、いたつて気がかりで、物騒な顔ぶれだ。だから婚姻や賜姓（しせい）によつて懷柔される一方、改易（かいえき）（士族の籍を除き、家屋敷・領地を没収すること。切腹より軽く、蟄居より重い刑）や転封、取つぶし、さては刃地追放などでおどされたり、参勤交代や普請（ふしん）の助役（すけやく）によつて、莫大な財力を常時消耗させられたりしている。

つづいて帝鑑の間。ここは、小倉（十五万石）、小田原（十一万石）もあるが、多くは五万石以下の中・小譜代大名がずらつと並んでいる。なかに、陸奥・中村（六万石）、出羽・新庄（六万八千石）、上野・沼田（三万五千石）などの外様も、若干まじっている。

おおむね三万石から十万石どまり、おもに譜代高家衆の詰める雁間（がんのま）、中小外様の多い柳の間、外様と譜代、いずれも小粒の菊の間など、いくつかの組織集団がきめられていて、それぞれの詰（つめ）の間に、家格と年齢によつて、派閥と席次ができる。

この詰間制（つめのま）も、八方目がとどいていて、譜代のなかに外様をとりこみ、外様のなかに譜代を潜入させ、相互の監視と牽制をねらっている。たとえば、百万石の加賀のごとく外様ながら、大廊下詰にたてまつられたばかりに、幕末動乱にも、積極的に動けないで、明治新政権に割りこめなかった例もある。また、中のなかへ小をまじえ、小のなかに中をまぜ、ときには詰間変えもやつて、恩を売り、にらみを利かしといったあんばい。幕府による諸侯支配の組織が、この詰間制だった。

こうして、二百数十年にわたつて、溜間詰中心の面々によつて、幕政が独占されつづけてきた。禄高でいえば、中粒どころ出身の実力者が幕閣に陣どり、また、この仲間のうちから、幕政を担う後継者が育つてもきたのだ。そのように幕藩の体制と秩序がかためられてもきたこと、いうまでもない。

溜間詰は、幕権を握って離さない実力集団で、背後には、百四十五家の譜代の支えがある。溜間詰からいっても、譜代からしても、その筆頭が彦根藩であって、安政五年の夏には、その藩主である、四十四歳の井伊直弼が、大老——幕閣の総理に就任したのだ。

ところで、二百何十年、溜間詰の譜代大名に政権を独占されて、傍観させられてきた大廊下詰や大広間詰の、大ものの面々が、外交問題で、ヨーロッパ諸国と京都朝廷とにはさまれて、きりきりまいさせられた幕府が、基盤のもろさをさらけ出すと見てとると、だまっているはずがなかった。大廊下詰では、水戸の斉昭が、ご三家の家柄を笠に、ものおじしない強引な言動で、天下の注目をあびた。その主張は、十八番の水戸学の立場からの激烈な尊攘論教条の一点ばりだった。

大広間詰からは、薩摩の島津斉彬や土佐の山内豊信（容堂）が名乗りをあげて、外様代表としての幕政参加を要求した。大廊下詰からは、家門筆頭の越前の松平慶永（春嶽）が、年少精鋭の側近、橋本左内や透徹した開明思想のもちぬしで政治指南番の横井小楠らにささえられて、幕政改革の声をあげた。一団の譜代大名の代表者によって構成される、徳川一家の幕府を挙国一致の連合政府に改組すべしというのである。

国論は決定的に分裂した。こうして、内部的な矛盾と対立をかかえこんだ幕府は、通商条約と將軍継嗣という、直面する二題目をめぐって、朝廷との、血みどろの決戦を強いられたのだ。条約問題は、攘夷か開国かの争いであり、継嗣問題は、三家・紀伊の徳川慶福か、三家に次ぐ三卿の一橋慶喜かの争いである。第十三代將軍家定は、精神薄弱に近く、多病でもあって、世子を挙げることができない。そのあとつぎの決定をめぐる争いである。

ところで、慶喜は、水戸の斉昭の七男だ。向う気ばかりめつぱう強い、癩癥の自尊居士である斉昭

は、どうあつても、わが子を將軍家の継嗣におくりこまなくては、腹の虫がおさまらないのだ。

大老井伊が自分に課した使命は、幕権の改革ではなくて、幕権の維持であつた。ゆるぎ出した幕府の権威を斷乎回復することであつた。それにつけても、三家や家門、まして外様などの手出しをゆるすわけにはいかない。

こう決意をかためた大老にとって、外様代表格の薩摩と家門筆頭の越前が、手を組んで、幕府改革の旗じるしをかかげた一橋慶喜擁立の動きほど、危険かつ奇怪なものではなかつた。まして、わが子を將軍にしたてて、まんまと本家に乗っ取ろうとの斉昭の不敵な野望をうち碎かないことには、大老就任の甲斐はない。譜代筆頭の格式を誇る井伊家は、具足指物ぐそくさしものなどすべてに赤を用いることが許されてゐた。江戸永田町の彦根藩邸の表門も赤くぬられて、直弼は赤鬼の異名をとつてゐた。

この赤鬼は、強靱一徹な保守派として、自分を鎧うことを決意した。そのためには、將軍継嗣問題のような徳川家の内輪の問題に、家門や外様などの口ばしを入れさせてなるものかと思つた。ましてや、紀伊の慶福は、將軍家定のいとこであつて、慶喜なんぞよりは、ぐんと血が近い。慶喜の年長（慶喜は十七歳、慶福は八歳）と聡明と人望とを挙げて、擁立理由に数えたてているが、年長が何だ、聡明が何だ、まして人望なぞが何だというのだ、かんじんの血を信じないで、何を信じようとするのか、馬鹿者ども、血と家を信じなくなれば、將軍家だろうと、天皇家だろうと、世の中は、すべて総くずれになる、負けてたまるかというのが大老井伊の肚はらのうちだつた。その信念に、水戸憎しが加わつて、のっぴきならぬ使命感で身のひきしまる思ひだつた。

直弼による不退転の弾圧は、こうしてはじまつたのである。